

## 中国遼寧省撫順市における公園一校卓球クラブの 運営体制に関する事例研究

劉 俊希

永田秀隆

キーワード：中国 遼寧省撫順市 体育伝統項目学校 卓球クラブ 管理体制

A Case Study on Management System of Park One School Table Tennis club  
(tradition item school) in Liaoning Fushun City in China

junxi Liu Hidetaka Nagata

### Abstract

This research was based on literature review method, questionnaire and interviews. And the interview participants including the administrator, the coach and the students (players) of Liaoning Fushun City park One School Table Tennis Sports tradition item school (table tennis club). Investigate the current controlling system of the school traditional items schools, and deeply analyze it intended to clarify the situation. Moreover, The researcher expect to suggest the optimum style in training of preliminary human resources of Table Tennis Sports tradition item school Liaoning Fushun City.

The main research contents are the following : the human resources of the table tennis club (basic situation of students' selection, status of each student, the situation of taking out the students and current status of teachers (coach)); the table tennis club's practice situation (practicing time of table tennis club, students' schoolwork and practice situation, mental attitude of administrator and coach of the the table tennis club for practice time and their work (the enthusiasm on work or not ) ; the situation of current competitions ; the table tennis club of backward service supports (table tennis facilities or equipment and the current situation of expenses); the residential area and commuting situation ; students' evaluations of the table tennis club.

## I. 序論

### 1. 背景

2008年の北京オリンピックにおいて、中国代表団は歴史的な金メダル総数で一位を獲得し、また卓球競技においては男女シングルの金銀銅と男女団体の金メダルを獲得した。次の2012年ロンドンオリンピックにおいては国外でのオリンピックにおける最高成績を収め、中国スポーツの高いレベルを見せ、卓球においても金メダルを全て獲得した。これらの成績を取れたのは中国が実行している国家直轄型の育成方法のおかげだと言えよう。中国は全土をあげた力でスポーツ選手たちをサポートしているのである。しかしどんなことにも両面性がある。優れた成績の裏にはこうした体制からもたらされたデメリットもある。万一怪我や病気などで選手生命が断たれるようなことが起こった時に、つぶしがきかないというリスクが大きい。また、基礎学力も身につけていないアスリートが多いため、失敗した場合の職業探しは至難の業であることが現状なのである。こういったことの改善が必要であると考えられる。

中国の指導層は以前からスポーツの発展を重視してきた。1952年毛沢東は中華体育総会の成立時に「発展体育運動、増強人民体質」（スポーツを発展させ、人民の体質を向上させる）という言葉を残した。同年、中国共産党組織部は共青团中央と一緒に「选择专项运动选手集中培训的通知」を出し、スポーツと国家の地位との強い関係性を示した。1959年、当時の周恩来総理は『政府報告』の中にスポーツ分野においては普及とレベルを高めることを基本方針にし、徹底すると示し、中国としては初めて明確にスポーツ分野の基本方針を決めたのである。この方針は中国の体育事業の全面的な発展を促進し、2008年に胡錦濤元国家主席が「国を挙げての体育強化プロジェクトを活

かし、全面的に総括し、予備軍にあたるスポーツ人材を発掘し、育成する。」と指摘した。以上のことから分かるように中国の指導層は世界スポーツの流れと中国における体育事業の欠点を認識しており、さまざまな変化に対応できるような体制を作ろうとしているところである。

2003年、当時の中共中央総書記である胡錦濤氏は第16回三中全会で正式に「科学的発展観」を発表した。科学的発展観は、中国の現代化を導く理念で、「人を基本」とし経済・社会・政治・文化など「全面的」で、それらが協調した「持続可能な発展」とされている。科学的発展観の発表と実施により中国共産党が社会主義国家の建設に対する認識をさらに深め、新たな段階に入っており、体育事業においてもこれから進歩していく方向性が示された。

上述の内容を背景にし、1960年代から始まり、80年代から広く展開されてきた体育伝統項目学校は、もう受け身の役割ではなくなっている。体育伝統項目学校に関する研究は今までの体制の改善や内部関係の調節と比較に限らず、社会の発展や変化を背景としたマクロ的な視点でこれからどうやって発展していくかということを検討し、研究をすすめるべきだと考える。こうすることでその研究は論理的で実践性のある意義を持ち、中国の体育事業における更なる発展の力になると信じている。

## 2. 遼寧省撫順市公園一校および公園一校卓球クラブの概況

公園一校は1959年に創立し、労働公園の東に位置し、撫順市新撫区教育委員会に所属し、公園地区の子供の義務教育を担っている公立学校である。現在は28のクラスがあり、600人余りの生徒が在学しており、74人の教職員が在職している。

公園一校卓球クラブは1973年3月に創

立し、今まで40年余りの中で「全国伝統体育項目先進単位」、「遼寧省中小学校体育課外練習先進単位」と評価され、国家級卓球体育伝統項目学校であり、たくさんの体育予備人材を送りだしている。

公園一校卓球クラブは公園一校が管理し、公園一校の書記（校長にあたる）は卓球クラブの管理責任者を兼任する。主にクラブの管理と学校とクラブの行政を担当している。公園一校の卓球クラブは公園一校に属しており、卓球を普及し、スポーツ人材を育てるために学校が作ったクラブであるので、卓球クラブの名誉は学校の名誉と言っても良いのである。以下では公園一校卓球クラブのことを卓球クラブと略す。

## II. 目的

本研究は遼寧省撫順市公園一校卓球体育伝統項目学校の管理体制から出発し、すべての面で全面的に発展させるという教育思想と科学的発展観に基づき、この学校の管理体制の現状を調査し、深く分析し、実情を明らかにすることを目的とする。そして、遼寧省撫順市の卓球体育伝統項目学校の予備人材の養成における最適な様式を見つけ出したいと思う。遼寧省、あるいは中国の卓球体育伝統項目学校の管理体制の発展のために有意義な研究として位置づけと考える。

## III. 研究方法

### (1) 文献調査法

- ①公園一校卓球体育伝統項目学校の内部の管理資料に対して調査と整理を行う。
- ②インターネット上で卓球体育伝統項目学校の文献について調べ、先行研究の検討を行う。

### (2) アンケート調査

- ①調査対象：公園一校卓球クラブの利用者を対象とし、アンケート調査を行っ

た。

- ②調査時期：2014年3月15日～22日（配布数：50部、有効回収数：43部、有効回収率86%）。

- ③調査内容：クラブに入った目的、クラブを選ぶ第一の要因、利用者の居住地域、クラブへの満足度、クラブへ通う主要な手段、通うのにかかる時間等。

### (3) インタビュー調査

- ①調査対象：公園一校卓球クラブの経営者と指導者にインタビュー調査を行った。

- ②調査時期：2014年3月24日～30日。

- ③調査内容：経営者に対して（卓球の競技歴、競技成績、経営歴（公園一校卓球クラブ）、クラブ利用者の全体数、経営する方針、クラブの事業内容、場所の面積、立地条件、誘致距離、クラブの資本金、資金の内訳と支出、利潤状況、クラブのプロモーション等）。指導者に対して（卓球の競技歴、競技成績、指導歴、指導の方針、クラブへの満足度、専任か兼任か、個人コーチの実施の有無等）。

## IV. 結果と考察

### 1. 卓球クラブの生徒の基本状況

表1 卓球クラブの生徒（選手）

年齢	実数 (%)
6	14 (32.6%)
7	7 (16.3%)
8	6 (14.0%)
9	5 (11.6%)
10	6 (14.0%)
11	3 (7.0%)
12	2 (4.7%)
合計	43

表2 卓球クラブに入部した動機

動機	実数 (%)
体を鍛える事	28 (66.7%)
趣味として	9 (21.4%)
プロを目指す事	1 (2.4%)
その他	4 (9.5%)
合計	42

表3 生徒(選手)が1対1の指導に参加する状況

1対1	実数 (%)
やっている	28 (66.7%)
やっていない	9 (21.4%)
合計	42

時給：40元/1人  
40元=658円

卓球クラブの生徒については、インタビューを通して5~6年生の数が減っており、中学校の受験を控えていることがその原因であることが分かった。保護者は練習より学業のほうが重要であり、学習を妨げない前提で練習に参加させている。表2から「体を鍛える」「趣味」という目的で練習に参加している生徒が多数であり、5~6年生になってくると学業を優先し、練習をやめる理由の証明にもなっている。一方で、年を重ねるにつれ競技レベルが高まり、先生の推薦で省のチームに送り出した生徒も多く存在する。

1対1の指導とは、コーチがひとりの生徒(選手)に専門的な指導と訓練をすることである。こういう練習は技術レベルを有効的に速やかに向上させ、予備人材を育成する重要な段階である。表3で示したように、1対1の指導費用が合理的でも高くなくても、ただわずかな生徒(選手)が自分自身の技術レベルを向上させたいために活用する。

## 2. 卓球クラブの生徒(選手)の選抜状況

生徒(選手)の選抜はスポーツ訓練のスタ

ートであり、学校にとっても重要なことである。卓球クラブの管理者と教員にインタビューした結果、学生を選抜する、あるいは勧誘することが少なく、校内で卓球を押し広め、校外においてはメディアを通して宣伝し、試しに練習に来た生徒を指導し、教員自身の経験で判断し生徒を選んでいるわけである。

## 3. 卓球クラブの生徒(選手)を送り出す状況

上の学校やチームに優秀な予備人材を送り出すことが学校を評価する時の重要なポイントになり、その状況の分析が大変重要である。調査を通して、1973年に卓球クラブを創立してから今まで、ナショナルチームに8人、各省チームに27人を送り出し、10人が卓球健将の称号を獲得している。しかし、いつ送りだしたかという記録はない。管理者によると、記録を担当する教員は決まっておらず、普段の仕事が忙しいので、記録の仕事は忘れがちである。このような小さなことは構わないと思うかもしれないが、学校の発展を妨げることになりうるので、送り出した生徒(選手)の記録管理を徹底することが望ましいのである。

## 4. 卓球クラブの教員(コーチ)の現状

表4 卓球クラブ運営者と指導者(教員・コーチ)の特性

	運営者	A指導者	B指導者	C指導者
年齢/性別	50歳/女	25歳/男	30歳/男	50歳/女
学歴と専攻	大学体育学科卒	専科学校理科卒	専科学校中医学科卒	専科学校理科卒
卓球競技歴	10年	8年	8年	7年
卓球競技成績	遼寧省大会3位(団体) 撫順市大会1位(シングルス)	撫順市大会2位(シングルス)	全国向陽杯2位(団体)	撫順市大会1位(団体)
経営・指導歴	24年	5年	8年	15年

教員(コーチ)は公園一校卓球事業において重要な役割を果たし、教員(コーチ)の数

と質が公園一校卓球事業の今後の発展を左右していると言っても過言ではない。

教員は省あるいは全国大会で良い成績を取っており、初心者を指導するには余裕がある。しかし、教員達は短大（専門学校）卒が多く経験が浅いという欠点がある。

3名の教員は外部から招聘したコーチであり専門的な卓球コーチである。教員は校内の研修に参加経験があるが、省あるいは全国の研修には派遣されなかったため、理論的な知識や指導方法については身につけておらず、普段の指導に支障が出ることもある。その原因としては政府からの予算が不足していることが挙げられる。

## 5. 卓球クラブの練習時間

表5 卓球クラブ生徒（選手）の練習時間（一日）

練習時間	実数（%）
2時間～2時間30分未満	15（34.9%）
2時間30分～3時間未満	14（32.6%）
3時間以上	14（32.6%）
合計	43

表6 卓球クラブ生徒（選手）の練習頻度（一週間）

練習頻度	実数（%）
3回	2（4.7%）
4回	7（16.3%）
5回	25（58.1%）
6回	9（20.9%）
合計	43

練習時間は練習の質を保証するものであり、技術の向上を左右している。一般的に一回の練習時間は2時間～2時間半が一番合理的であるとされる（体育伝統項目学校管理方法による生徒（選手）の練習時間は毎週3回以上毎回少なくとも1時間半である）。表を見ると練習時間は充足しており、うまく割り振っている。まだ規定練習の後にも強化したい選手に対して合理的に時間を使

っているのである。

## 6. 卓球クラブの学業・練習状況

表7 卓球クラブ生徒（選手）の主な練習時間帯

練習時間帯	実数（%）
午後	40（93.0%）
夜	3（7.0%）
合計	43

表7を見て分かるように、生徒（選手）たちは授業が終わってから練習に参加しており、基本的に授業参加に支障が出ていない。しかし、大会に参加すると省と全国大会は約一週間かかるので、生徒たちは授業を欠席して大会に参加するのである。管理者の話によると欠席した分の補講が行われておらず、授業とのバランスがうまく取れていないというのが現実である。長期的になると生徒の学業に支障が出ることは言うまでもない。普段の練習時間帯は授業と被っていないが、大会に参加した生徒の補講については学校がこれから行うようにすべきである。

## 7. 練習と仕事に対する卓球クラブ管理者と教員の心構え（仕事を重視しているか）

管理者は全面的に卓球を普及し、また予備人材を養成し上のチームや学校に優秀な人材を送り出すことを目標にしながらクラブを管理している。毎週、練習状況に対して2～3回視察を行っていることが管理者のインタビューで分かった。

インタビュー調査を通して、教員が練習プログラムを作成する時に生徒の年齢とレベルに基づいてふさわしい練習課題を作成していることが分かった。また、月や週を単位に短期目標を、年を単位に長期目標を設定している。月末ごとに管理者に報告し、年末には総まとめの会議が設けられている。

管理者が教員の仕事を監督することで仕事の質が保障され、教員が練習の計画を立てることは生徒の技術向上にもつながっている重要な要素になっている。それは科学的、系統的、長期的な過程である。以上の調査で分かるように卓球クラブの管理者と教員の仕事に対する態度は非常にまじめで、試合ごとに計画が変わるという現象がないことが分かった。

### 8. 卓球クラブの競技試合の現状

競技試合は練習を評価する核心的なポイントであり、練習状況を改善し向上させる役割がある。学校の文献を調査した結果、卓球クラブは平均的に毎年全国レベルの小学生大会に2回、省内の小学生大会に3回ほど参加しており、普段の練習成果や現時点の実力をチェックするには十分である。

しかし、管理者の話によると、毎年、試合の開催地が異なり、政府からの予算が限られており、学校は少しの補助金しかもらえていないので、ほとんどは生徒（選手）の自己負担になってしまう。開催地が遠いと交通費などが高くなり、払えない場合もあり、省内で開催される大会に参加すると負担する費用は安くなるが、全国大会とのレベルや環境、雰囲気の違いがあるので、技術向上から考えると省内の大会に参加するだけでは無理がある。

### 9. 卓球クラブの卓球場と設備の現状

グラウンドと設備は体育伝統項目学校の体育事業が順調に発展している物質の保証である。《全国体育伝統項目学校標準及び方法》の規定において、学校は体育教育の仕事を展開すること、授業以外の体育活動及び伝統項目の訓練と仕事をするグラウンドと設備とを必ず備えることが必要とされる。

管理者にインタビューしたことと実地調査を通して、卓球クラブの卓球場は土地面

積が1000㎡を占め、学校の4階に位置する。卓球台は26台で、しかも卓球場の床は卓球専用で滑って転ぶことを防ぐプラスチックを敷いている。体育教育と訓練のニーズを完全に満たすことができる。

### 10. 卓球クラブの経費

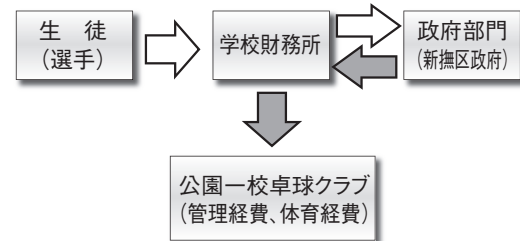


図1 卓球クラブにまつわる経費の関係図

試合の参加状況は、経費に大きく左右されており、政府からもらった予算だけでは足りなくなっている。管理者の話によると、経費は主に毎月生徒からもらう会費であり、その会費はまず、学校の財務所に行き、次に政府部門に渡す形になっている。そして学校に管理経費（給料や光熱費など）と体育経費（練習や試合参加での経費）を配る。また、毎年、上級の政府から補助金はもらっているものの、たくさんの大会に参加するとすぐ消えてしまうのもっと補助すべきである。

### 11. 生徒の居住地と通学状況

表8 生徒（選手）の居住地

居住地	実数 (%)
新撫区	35 (81.4%)
順城区	6 (14.0%)
望花区	1 (2.3%)
その他	1 (2.3%)
合計	43

表9 生徒（選手）の主要な通学手段

通学手段	実数 (%)
徒歩	26 (63.4%)
バス	11 (26.8%)
自家用車	3 (7.3%)
タクシー	1 (2.4%)
合計	41

表10 卓球クラブまでかかる時間

所要時間	実数 (%)
10分未満	17 (41.5%)
10～20分未満	14 (34.1%)
20～30分未満	6 (14.6%)
30分以上	4 (9.8%)
合計	41

表8から学校が位置している新撫区にほとんどの生徒が住んでおり、管理者の話によるとほかの区域にも卓球のクラブがあり、しかも教員のレベルは低くない。同レベルだと近い所を選ぶので生徒の募集は教員の指導とレベルにかかっていると言っている。教員自身のレベルを向上させ地域との交流を深めることで多くの生徒が入ってくるようになるのだろう。

生徒（選手）が卓球クラブへ通う主な手段は歩きとバス乗車である。かかる時間は、10分未満と10～20分未満の人を合わせると75.6%を占め、20～30分未満と30分以上の人を合わせると24.4%となる。

通う手段とかかる時間は生徒（選手）に不便をもたらすことがない。それゆえ、新撫区に住んでいる生徒（選手）は交通不便の影響を受けていないことが分かった。しかし、少数の生徒（選手）は途中で長い時間をかけている。

## 12. 卓球クラブの生徒（選手）の評価

表11 卓球クラブを選んだ第一の要因

選択要因	実数 (%)
クラブの設備が良い	13 (31.0%)
クラブまでの距離が近い	12 (28.6%)
クラブの評判が良い	8 (19.0%)
交通の便が良い	5 (11.9%)
クラブの会費が適切	3 (7.1%)
その他	1 (2.4%)
合計	42

表11から、卓球クラブを選んだ主要因は設備が良いことと家からクラブまでの距離が近いことであり、その次は評判が良いことである。この状況が現れてくるのは、卓球クラブ自身の管理及びコーチの教え方とレベルがより完璧となる可能性がある。もう一つの可能性があるのは、地域の制限と家庭の生活条件を受ける影響で、選択する基準点で家から近いことを優先的に考えることである。いずれにせよ、卓球クラブの管理者とコーチは重視しているはずであり、合理的に適切な解決方法を与える。

表12 卓球クラブへの満足度

満足度	実数 (%)
不満	1 (2.5%)
やや不満	1 (2.5%)
やや満足	9 (22.5%)
満足	29 (72.5%)
合計	40

表12が示す通り、95%の生徒（選手）は卓球クラブを肯定的に評価している。これも客観的に卓球クラブのそれぞれの管理及び練習方法を承認していることを証明する。しかし、二人の生徒（選手）は満足しておらず（どこか不満かは書いていない）、これも証明した卓球クラブは絶え間なく管理の訓練の仕事をまとめ、欠点のない状態に

している。

表13 生徒（選手）が毎月卓球クラブに払う会費

会費／月	実数（％）
200 円	14（32.6％）
300 円	29（67.4％）
合計	43
	200 円 = 3290 円
	300 円 = 4935 円

表14 払う会費（値段）の適性度

会費適正度	実数（％）
やや適正	3（7.0％）
適正	40（93.0％）
合計	43

毎月生徒（選手）が卓球クラブに払う費用の金額は安い。大部分の生徒（選手）はこの値段を受け入れることができている。これも卓球クラブの卓球運動を普及し、予備人材を育成し、卓球事業の発展のために貢献をすとの創立思想及び方針と同じである。

## V. 結論

### 1. 結語

研究を通して、卓球クラブは生徒（選手）を選抜する（人材のスカウト）ことにおいて問題点が存在しており、人材を選抜する専門的なプロセスがないことが明らかになった。管理、記録においては管理者と教員との役割が明確ではなく、管理記録を担当する専門スタッフがいない。教員においては学歴が比較的低く、指導経験が浅いと欠点があり、卓球コーチを対象とする講習会や研修会に参加する機会が少なく、その経費として政府からの予算が足りていないことがその原因として挙げられる。普段の練習時間は充足しており、合理的に割り振っている。生徒（選手）の出席状況と練習状況は良好で合理的に時間割を作っているの

で、学業を妨げることがほとんどないが、大会に参加するために授業に欠席した場合の補講がないため、生徒（選手）が授業についていけないことがしばしば発生している。卓球クラブの管理者と教員の仕事に対する態度は非常にまじめで、試合ごとに計画が変わるとい現象がないのである。大会の参加状況においては、毎年試合の開催地が異なり、政府（行政）からの予算が限られており、大会への参加資金が不足している。生徒の募集においては地域の制限と教員レベルの影響を受けている。生徒の通学状況においては、交通不便による欠席がなく、良好である。生徒（選手）の卓球クラブに対する評価は良好であり、負担する費用の金額についてもほぼ問題なく受け入れている。

## 2. 実践的示唆

卓球クラブの現状と管理体制を分析した結果、さらに卓球を普及し、優秀な人材を育成し、卓球事業に貢献するために卓球クラブは以下の問題を重視し改善すべきであると考えられる。

- 1) 生徒（選手）の選抜をもっと重視し、教員がそれについての知識を身につけるべく、自分の目や経験にだけ頼ってはならない。
- 2) 送り出した生徒の記録管理において、教員の役割を明確にし、管理を強化する。
- 3) 省、あるいは全国的な研修に参加する回数を増やし、教員の論理的な知識と指導方法を向上させる。
- 4) 学業をもっと重視し、欠席した分の補講をきちんと行う。必要であれば教員を放課後に手配する。
- 5) 経費・資金においては管理者が政府と話し合い、大会の参加資金と研修の参加資金が足りていない現状を具体的に説明し、それについての経費を割り当



てもらおう。

- 6) 生徒募集においてはメディアを使った宣伝だけではなく、学習交流や交流試合を行い地域に密着した交流を促進することで学校の宣伝を行うべきである。

### 3. マクロの視点から見た公園一校卓球伝統項目学校の発展を妨げる問題点

#### 1) 教員やコーチの採用制度

卓球教員の職級には初級、中級、副高級、高級がある。評価内容は実技、理論および専門性のある論文である。中級以上は国が評価などを行う。

しかし、国は採用制度においては明確な規定を定めておらず、一定の能力があり、実技さえできれば誰でも卓球教員やコーチの仕事に就くことができる。このような現状は練習における質の向上を妨げている。

#### 2) 学習と練習との矛盾点を解決し、スポーツと教育との一体化を図る

中国ではスポーツ選手が引退した後の進路が少なく、大学に入っても、職に就いてもなかなかうまくいかない。彼らは小さい頃からスポーツ学校に入り、スポーツの練習がメインとなり、勉強はあまりしておらず、義務教育の中卒レベルにも達していない人も少なくない。

アメリカの学校では勉強に影響を与えずに学習時間を保証することを前提にスポーツの練習に参加している。そして、統一の入試を通して、成績優秀者だけが NCAA に進学できるようになっており、この点については中国とそれほど変わらない。しかし、NCAA では学校間の大会を通して優秀な学生を援助し、学生の完成を促し、練習時間に対して厳しい時間制限を設けている。具体的には、練習は一日 4 時間、週に 20 時間を超えてはならず、また毎年の試合参加日数や回数にも明確な規定がある。これは毎

週 3 回以上の練習、毎回 90 分間を行うという中国のやり方とは違う。アメリカが制定しているスポーツのスタンダードは学生に対して、成績を狙い、体を鍛え、人を育てるという一体化した教育を行っており、バランスよく、学生に知識、スポーツ能力やマナーを教えている。この教育はスポーツの知識、刺激などの特徴と少年の好奇心、元気さや負けず嫌いな気持ちという特徴とうまく結んでいる。これは一体化した教育のよいところである。生徒の力でできる範囲内で教育を受け、体を鍛え、そして、スポーツのレベルを上げる。こうした教育を元に NCAA のランキングの上位にある学校の知名度や経済支援体制がしっかり整っていることからアメリカでは毎年三分の一以上の中高生がスポーツの練習に参加している。それによって各種目において数多くの人材の予備軍が形成されているわけである。

公園一校卓球伝統項目学校は今後の発展と政策の変動の中で学習と練習との矛盾点を解決し、スポーツと教育との一体化を徹底的に実行し文武両道のスポーツ選手を育成すべきである。こうすることで中国における競技スポーツの発展を持続させることができよう。

## VI. 課題

卓球クラブの生徒(選手)を対象としたアンケート調査を実施したが、もともとの母数が少なく単純集計のみになってしまい統計的な処理ができる状況になかった点は悔やまれる。

また同年齢の子供たちに卓球を指導する団体は今回事例として扱った組織以外にもあることから、当初は本事例とは異なる団体も調査対象として考えてはいたものの、調査協力に対して快い返事が頂けず、単一組織の事例研究となってしまった。本来で

あれば、関わりのある複数の組織の組織間関係等について検討出来れば、より現場に対する実践的な示唆ができたのではないかと思われる。機会があれば、そのような視点で研究が継続できればと考える。今後の課題としたい。

域スポーツクラブ育成プラン～地域住民が主体的に参画するスポーツ環境の構築を目指して～

## Ⅶ. 文献

- 许闽峰(1996)我国体育传统项目学校的由来和发展[J].中国学校体育, (1):61-63
- 井晓蒙(2000)对体育传统项目学校建设的几点看法[J].山东教育科研, (2): 124
- 体育传统项目学校管理办法(2000).体群字[2000]086号
- 凌平等(1998)浙江省体育传统项目学校竞技体育后各人才的调查研究[J].浙江体育科(4):3-9
- 王晓楠(2010)北京市体育传统项目学校现状的调查研究[D].首都体育学院硕士学位论文.
- 徐本力等(1990).对我国现行传统项目学校的训练体制现状的调查研究.安徽体育科技[J](1):1-20
- 赵玉珍(1991)对天水市体育传统学校业余训练的现状分析和对策的探讨.天水师专学报(理科版)[J].(3):105-109
- 郭维民等(2000)体育后各人才管理和训练改革初探.山东体育科技[J].22(2):87-88
- 白志红(2002)佛山体育传统项目学校的现状研究.体育函授通 [J].(18):56-57
- 李余龙等(2005)山西省体育传统项目学校现状与发展对策研究[J].中国体育科技, (1):135-137
- 李相如(2006)中国体育传统项目学校发展现状, 管理机制研究.体育科学[J] (6):16-2
- 王丽(2010)全国体育传统项目学校体育师资国家集中培训的现状研究[D].首都体育学院硕士学位论文.
- 山西省排球传统项目中学排球队现状调查研究(2010)[D].山西大学硕士学位论文研究.
- 公益財団法人日本体育協会(2013)総合型地